

開発のための援助

2007 年 3 月

政策研究大学院大学 大野健一

日本の開発援助においては、目的・内容、制度改革、広報（対国民・対ドナー）などが重要課題と思われるが、ここではのみ論じる。が確立されてはじめての方向性が決まると考える。

1. ツートラックが大前提

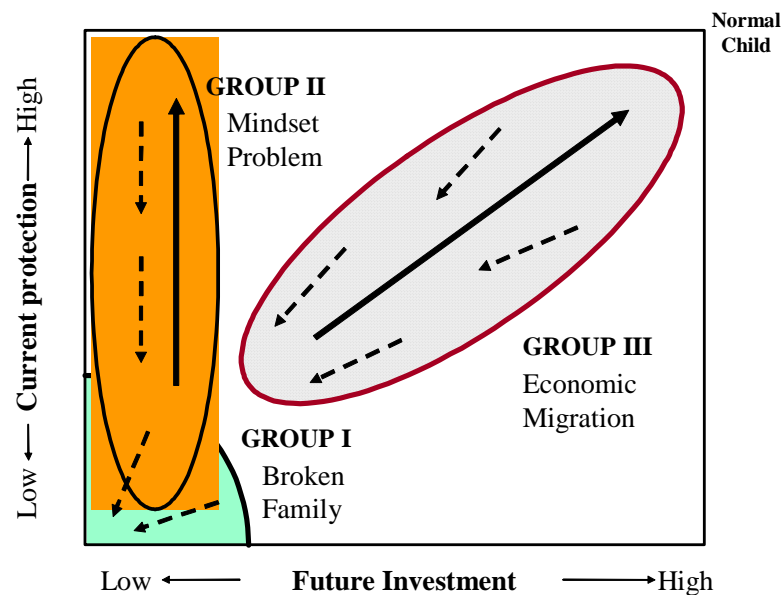
貧困救済 眼前の悲惨に手を差し伸べる

成長支援 伸びようとする力に支援を与え障害を取り除く

日本の目標はこの両方であるべき。人により、組織により、対象国・ケースによりこれらを柔軟に組み合わせてよい。一つに特化する必要はない。

例、ゼミ学生指導

例、ストリートチルドレン（下図）



Source: Duong Kim Hong and Kenichi Ohno, “Street Children in Vietnam: Interactions of Old and New Causes in a Growing Economy,” VDF Discussion Paper no.6, July 2005.

Note: The vertical and horizontal axes represent the two dimensions of the *situation* of street children. On the other hand, groups classify street children by their *causes*. The solid arrow indicates the aspiration of each group while the dashed arrow indicates unexpected setbacks.

2. 「救済」と「開発」は基本的に別問題

救済（紛争、難民、政府・国づくり、民族対立、最低限の食料・サービスの提供）

開発（開発意志とリーダー、開発戦略、インフラ、人材、制度）

必要なマインド・経験・技術は全く異なる。これらを混ぜないで区別・分業することが重要。

紛争国で「復興から成長へとシームレスにつなげる」など、まず不可能。復興から成長に早期移行できるのは戦災・天災を受けた先進国のみ。多くの途上国は「破壊・混乱は終わったが自立的成長が始まらない」状態にある。

3. 開発支援の基本 成長支援と新たなひずみの解消の2本立て



ともに上昇する喜び、それを支援する喜び

ブーメラン効果を恐れないために、国内政策にビジョン・具体的措置が必要

4. 日本は現場に密着した具体的支援を続けよ

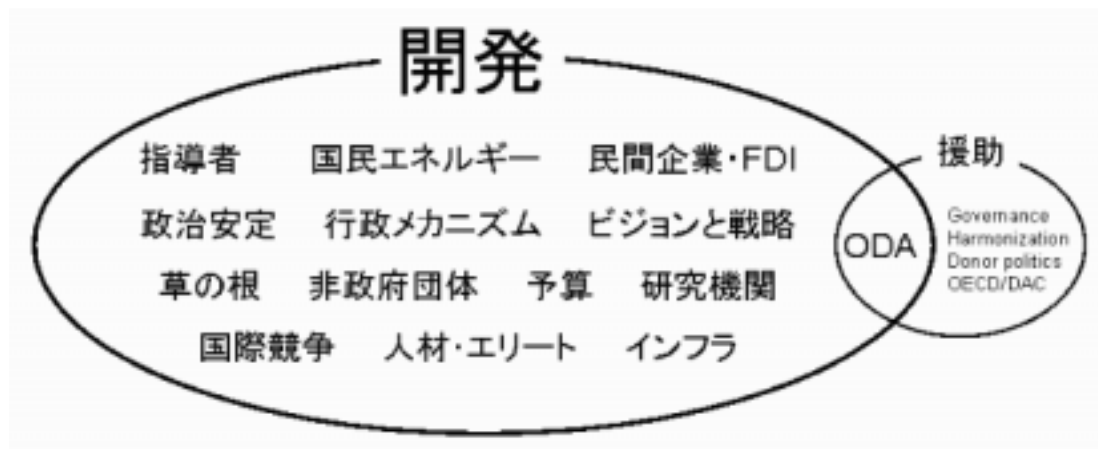
東西の「認識論」のちがいは援助にも出る 理論枠組志向 vs 具体的経験重視

例、ガバナンス論争（英国） アフリカ neo-patrimonialism の政治学研究、世界共通のガバナンス指標は？工業化に適したガバナンスとは？

例、アジアにおける工業化支援（日本） 「ベトナム二輪車マスタープラン」共同執筆、工場訪問の積み重ね、現地化のための部品リスト、交差点改良・大気汚染測定

日本の開発支援は長期一貫性（成長のための人材・インフラ）があるが、無口。世銀はその逆。主要ドナーとはきちんと真剣に付き合うが、ついていけない、圧倒されない、自分を捨てないことが大事。

5．開発にとり、援助は部分的でオプションな手段にすぎない



他要素がないときに ODA だけ流入しても、援助依存症・腐敗汚職・消化不良をまねくだけ。

DAC の定義・基準にこだわる必要なし。

ODA（政府ベース）にこだわる必要なし。

いずれの概念もいったん捨てて、日本の目的に即した新枠組・基準を作り上げたほうがよい。

6．日本の比較優位

「卒業のための支援」(Aid for Graduation)

- A 成長支援（人材、インフラ、産業貿易投資、開発戦略）
- B 成長が生み出す新問題の解消（環境、格差、都市化、交通、内外文化…）

「天災の予防・救援・復興」(人災・紛争でなく)

これらを日本の援助の基本方針として確立し、国民と世界に宣言すること。

軸足を donor bureaucracy & politics から真の開発問題にシフトすること。

抽象的議論ではなく、現場における具体的方策の地道な積み重ねでやること。